

カント『啓蒙とは何か』を導きの糸として、「縮小社会研究会」の今後の在り方を考える

青野豊一

要旨

「縮小社会」の到来が避けられない事やその必要性を人々に理解してもらうことは、なかなか難しい。成長と言う夢(幻想)から覚めて社会の現状と今後の動向を冷静に直視しなければならないのだが、この前の戦争以後、多くの国民にとっての共通の夢であった経済的成長という夢を振り捨てることは、とても困難なことのようだ。夢から覚めよ、自覚的に生きよ、理性的判断をせよと言葉で迫っても、それはなかなかできることではない。「縮小」という言葉に、拒否反応を示す人たちが多い。カントは『啓蒙とは何か』で、他人の指示を仰がずに自分の理性を使う決意と勇気をもてと書いているが、このことも、本当に実現するのは難しいことであろう。カントは、普遍的な人間理性は他者の理性という回り道を通してしか近づくことはできない、としている。そして、自己の理性を使用する勇気をもつためには、他人からの精神的影響によって可能となるであろうと述べている。私たちの理性が、他者の理性に身を開いて異なった意見にも含まれている真理の一部を受け入れることで初めて、私たちは普遍的理性という共有財産に近づくことがなしうるのだ。「縮小社会」についての意識も、理論書や学術書や論文という学者等の後見人を通して広がるだけではなくして、周囲の人たちの日常の語りかけという精神的影響によって、人々の心に「縮小社会」の意識が宿ることが多い。意識の向上は、個々人が相互に影響しあってなされるものであり、大衆が自ら啓蒙するしか、その効果は発揮できない。だから、そのための一つの方法として、「縮小社会研究会」に自分が関わる個人的な理由を、「縮小社会」について考えるその人の日常生活に基づく「思考の地平」を話し言葉で書いて冊子として発刊することを提案したい。「少し長い自己紹介」を気楽に語る人たちがいることで、その冊子を読むことで、自然に感化され「縮小社会」について考える機会とすることができるのではなかろうか。

はじめに

人が歴史を正しく理解するために知らねばならぬのは、当に幻想なのだ。何故なら、根本に於いて、政治的行動やその他、もろもろのものを支配するのは幻想であって、理性でも、採算のとれる利潤でもないからだ。(ホイジンガ著、堀越孝一訳『中世の秋』中公文庫より)

日本社会が「縮小社会」へと向かっている事、そして「縮小社会」の到来が避けられない事やその必要性を人々に理解してもらうことは、なかなか難しい。成長と言う夢(幻想)から覚めて社会の現状と今後の動向を冷静に直視しなければならないのだが、この前の戦争以後、多くの国民にとっての共通の夢であった経済的成長という夢を振り捨てることは、とても困難なことのようだ。夢から覚めよ、自覚的に生きよ、理性的判断をせよと言葉で迫っても、それはなかなかできることではない。「縮小」という言葉に拒否反応を示す人たちが、まだまだ多い。特に、若者に多い。それに比べて、人生の二毛作目に入っている年配者たちは「縮小」という言葉に同意する人たちがいる。この研究会でも、年配者・年寄が多い。

そこで、この人たちの言動を活性化させることの意味とその手立てを考えていきたい。

カントは『啓蒙とは何か』で、他人の指示を仰がずに自分の理性を使う決意と勇気をもてと書いているが、このことも、本当に実現するのは難しいことであろう。

今の長期にわたる不況、昔のような高度経済成長のない現状の中、1960年代や70年代は、今と比べて日本経済の繁栄へと向かう明るい展望があつてよかったなどと言う大人たちがいるが、このような言動を信用してはいけない。このような事を言い出すのは、その人の思考がもう後ろ向きである証拠である。あの時代は、露骨な東西対立でいつ核戦争が起こるか分からないという時代状況であつたことを忘れてはならない。先が見えない不安感を、いつも抱いて私たちは生きていた。明るい未来展望などなかったのだ。先が見えないという時代は、こうしたらよいというはっきりした明るい道筋なんてなかなか見つからないものなのだ。いつも、お先真っ暗の手探りの状態で生きていたのではないだろうか。それなのに、このことを忘れてしまって「昔は、成長の時代でよかった」という懐古趣味の老人たちの話など、今を懸命に生きようとしている人にとっては、まさしく毒であろう。

もっと言えば、どのような時代や社会も、自信をもって人生の方針が立てられることはない。そして、これからもないであろう。年齢を重ねて経験を積んでも、はっきりした人生の指針なんて四苦八苦しなから自分で見つけるしかない。失敗しても、他を恨んでどうなるものではないというくらいの気概を持たなくてはならないのは、当然のことなのだ。うまくいかかった時は自分の心と相談して、自らの判断の間違いを悔いて反省するしかない。

でも、このように言いきるには、その時その時に、世界情勢と日本社会の状況のその仕組み・構造らしきものについて、自分なりの見通しを持つと努めなくてはならない。このことをしなくて、他の人や時代を恨み愚痴を言ってもどうにもならない。一人、我が心を慰める愚痴をぼつりと言うことがあつても、……。また、これから先の20年後や30年後、どうなるかについても、それなりの思考をしなくてはならない。今後の社会での自分の立つ位置を自分なりにはっきりしなくてはならない。どのような歴史状況で、どのような役割をしなくてはならないかを、……。たとえ、その時その歴史に立ち会うことができなかつたという結果になつても、……。人間の人生は、短い。人は何らかのために一生懸命頑張つても、その結果としての効用を自分では体験することができないことが多い。多くの人は、その頑張りの途中で死んでしまう。また、後の世の人は、その成果を当然のこととして、過去の努力を、途中で倒れた人たちに感謝しようとはしないことがほとんどであろう。これが実際の姿であろう。それでも、私たちは、なすべきことをしなくてはならない。感謝の言葉がなくても、……。

I カントの「未成年の状態から抜け出る」とは?

物事を普遍的に考えていこうとすると、目の前の人間を頼りとしては、あまりにも心もたない。自分の損得に露骨にとらわれたり、忘れることはたびたびであり、意見をころりと変えることなど、よくあることなのだ。だから、理性的・理論的思考が、どうしても必要となる。人の身体や精神状態のその時々都合に振り回されることなく、自分の判断や行動をそれなりに律するには、理性によって組み立てられた理論は必要なのだ。そして、この理論は、人間のその時々いい加減さから作り上げたものであつてはならない。誰もがもっている

「普遍的な理性」とも言えるものへの信頼に基づかなくてはならない。そう、カントのように。

そして、この作り出された理論は、私たちの日々の生活からすると、何やら物質的な心棒のようであり、あるいは自分にとってどうにもならない抵抗と言ってよいように作用するようにも思える。このような理論は、人間にとって、消し去ることのできない、否定しきることのできないものとして心に宿るようだ。

でも、美しいことを夢見て、醜いことをしてしまうことのないように注意しなくてはならない。理論家は、ともすると自分の作り出した夢の世界で生きてしまうことになりがちである。ここに、いつも留意して、理性的思考をしなくてはならない。

カントは、『啓蒙とは何か』(1784年60歳)の最初に、次のように書いている¹。

啓蒙とは何か。それは人間が、みずから招いた未成年の状態から抜け出ることだ。未成年の状態とは、他人の指示を仰がなければ理性(*原文のドイツ語では、悟性²)を使うことができないということである。人間が未成年の状態にあるのは、理性がないからではなく、他人の指示を仰がないと、自分の理性を使う決意も勇気ももてないからなのだ。だから人間はみずからの責任において、未成年の状態にとどまっていることになる。こうして啓蒙の標語とでもいうものがあるとすれば、それは「知る勇気をもて」だ。すなわち「自分の理性を使う勇気をもて」ということだ。(p. 10)

そして、「人間が未成年の状態」にいることの理由事例を、カントは三つ書いている。

- ・自分の理性を働かせる代わりに書物に頼り、
- ・良心を働かせる代わりに牧師に頼り、
- ・自分で食事を節制する代わりに医者に食餌(じ)療法を処方してもらう。

そうすれば自分であれこれ考える必要はなくなるというものだ。

ここでは、知識人や教会が民衆の後見人として、さも正しいとされることを説教して人々を従わせていることを批判している。この事例から分かることは、「未成年の状態から抜け出る」ということは、いかがわしい後見人を否定して、自分で自分のことを自己管理して行動しようとすることである。別の言い方をすれば、自己と他者との関係を、改めて自分なりに分配し直すことが「啓蒙」の意味であろう。

そして、さらに続けて次のように書いている。

お金さえ払えば、考える必要などない。考えるという面倒な仕事は、他人がひきうけてくれるからだ。(p. 11)

¹ 以下、特別に記載しない限り、中山元訳(光文社文庫)より引用している。*は私による補足である。

² 他の本では知性と訳しているのもある。訳者の中山氏の訳注では、悟性と訳すと感性との対概念としての狭い意味に解されるかもしれないので、ここでは広い意味として、狭義の悟性と判断力等も含むものとしての理性という言葉を使用した方が本来の意味に近いとしている。

ここから分かることは、「未成年の状態から抜け出」られないのは、この状態にしばらくつけられているのは、思考する勇気を阻害しているのは、「市場で貨幣によって商品交換をする」という関係が今の社会では大きな力を発揮しているためである。これは、お金による他人の労働に対する支配をそのまま認めている社会システムを変えていくことが必要であるということの意味していると解釈できる。

1789年のフランス革命の少し前、東プロイセンのケーニヒスベルク(現在ロシア領カリニングラード)は中継貿易で栄えていた。市場での金銭による商品交換が盛んな地域でカントは生きていた。

今の日本社会でも、カントのいた地と同じように市場での金銭による商品交換が主導的・圧倒的関係となっている。そこで、「未成年の状態から抜け出る」には、個々人が主体者として、日々の消費生活を反省して、その在り方を根本的に変更していくように思考していくことが最も大切なこととなる。現代社会では、例えば、ブランド品を、流行の品々を買い求める消費をめぐる競争に多くの人たちが駆り立てられている。でも、それをするには、収入を多くするためにたくさん働かなくてはならないが、これでは、「働き過ぎと浪費の悪循環」となってしまう。現代では、消費は時間との競争、利便性をめぐる競争となっている。宅配便は翌日に届き、即日配達バイク便や自転車便さえある。24時間営業のコンビニは、バイトたちの細切れの(深夜)労働で維持されている。

こんな消費生活が、素晴らしいのであろうか。私たちは、「働き過ぎと浪費の悪循環」という生活から降りなくてはならない。総務省の「労働力調査」では、正規雇用者は一人平均年間2300時間を、男子だけでは2500時間も働いている。これでは、消費に唯一の楽しみを見出すことになってしまいかねない。一日8時間働き、定時に退社して、週休2日、祝日15日、年休20日を実行すれば、労働時間は8時間×226日=1808時間となる。これだけで、現状より500時間も、700時間も減らすことができる。

社会の情報化が進み、オンとオフの仕切りがあいまいになってきているだけに、この切り替えが大切である。そうすることで、労働時間をきちんと管理してこそ、賃金と健康の管理ができるようになり、生きがいをもって働き、家族内の役割を果たす事ができ、自分の夢の実現を図ろうとする意欲をもつことができるようになるであろう。

そのためには、オンとオフの切り替えをはっきりさせて、自分の仕事の内容と責任の範囲が明瞭になっていなくてはならない。そのことで、一生懸命日々の仕事をしながらも、もう一つの自分の可能性を意識することができるようになるであろう。そのような時、人は充実感を感じて自由の感覚をもてると思われる。

II 「みずからの責任において、未成年の状態にとどまっている」

現状の社会問題や政治を批判する人たちがいるが、それだけでは世論を動かす力とはならない。公的な話を公開するより事前のこそこそ話での根回しを重視する閉鎖性が今も強い日本社会における政策決定のあり方や、個々の人たちがその場その場の集団に埋没してしまうという個々人の主体性の弱さ、さらに道徳や合理性に対する鈍感性等をまず問題としなくてはならない。社会や個人に、まだまだ乗り越えなくてはならないことがある。つまりは、個々人の主体性がはなはだ弱いということが、日本社会では決定的な問題であろう。

主体性をもった「市民」が育つことで多くの問題が解決するであろうが、それがなかなかできない、という大きな大きな問題がある。

この「市民」という言葉は、現在、国籍をもっている人ということ以外の意味を持たない状態になってしまっている。「成人」という言葉も、単なる年齢上の人を表すことでしかなくなっている。このような通俗化と平板化に対して、カントが啓蒙とは、「人間が、みずから招いた未成年の状態から抜け出すこと」としているのは、この墮落とも言い得る状態への警告であり、本来の啓蒙を行うことの大切さを言っている宣言文でもあろう。未成年であるのは、成人になれるという可能性があることなのだ。この可能性を放棄した人は、成人になれない年寄りに過ぎないことになる。

1. <人間関係や社会関係を、内と外に切り分けている>

原発が好きで、経済発展という夢が捨てられず、自分の身内の教育と健康のためであればお金をどしどし支出するという人たちがたくさんいるようでは、このような実態では、未成年の状態から脱することに意味を見出す人などいるのであろうか。他の人たちのことなど、社会のことなど、どうでもよいのであって、自分に関わる人のことだけが関心事で、その他のことなど、どうでもよいとする「未成年」の状態にとどまっている人がこの日本社会には多い。どうしてであろうか。まず、ここから考え直してみよう。

カントの言う「みずからの責任において」ということを、現代の日本社会に当てはめて考えてみよう。土居健郎氏の『甘えの構造』では、次のように書かれている。簡単にまとめると次のようになる。

日本社会では、「内」という日本語は、身内とか仲間内というように主として個人の属する集団を指し、英語のプライベートのように個人自体を指すことがない。つまりは、集団から独立した個人のプライベートな領域の価値が認められていない。だから、人格の統合の価値が認められることが少ない。また、個人や個々の集団を超越するパブリックの精神も至って乏しいようだ。

このことは、内と外という風に生活空間を区別して、異なった行動の規範を用いても、なんら変に思わないということになる。日本人がいわば理性的に行動するのは遠慮・配慮をする場合であるが、これを必要としない外部の世界へは積極的な関心を示さないし、極めて冷淡な態度をとることとなっている。また、内と外という分け方が個人的なものであり、それが社会的に容認されている。内と外の区別ははっきりしているが、公私の区別ははっきりしないから、公私混同が起きる事態となっている。

日本の経済発展で、旧来の人間関係をきつく規定していた村落共同体的な思考、閉鎖的集団倫理が都市化の中で弱体化・希薄化しているのに、内と外と生活空間を切り分けているという思考形態は、今も続いている。そのために、私たちは、周りから異邦人であると指さされても、このような思考形態から出る努力はしなければならない。そうしないと、「みずからの責任において、未成年の状態にとどまっている」と言われても仕方がないことになる。

2. <社会構造の変化を認めたくない>

二つ目には、また、多くの人たちが、社会総体の基本的な枠組みが高度成長の時期とは大きく変わってしまっていることに気付かないという、大きな問題がある。いや、分かっている

るのではあるが、成長という物語が、もう一度あって欲しいという切なる思いにとらわれているために、あのような右翼的な安倍内閣を支持しているのであろう。民衆の思考枠が、昔のままであって、社会構造の変化に気付いていないのだ。

何故、多くの人たちは、あいも変わらず「成長がすべてのケガを癒す」という価値観にとらわれているのか。どうして、このような意識状況になるのであろうか。このような状況では、ともすると私たちは絶望的な意識に落ち込んでしまうこともあるが、この理由としては、はっきりしている。

未来社会が縮小社会となることを、多く的人是漠然とは感じつつも、このようなことは「知りたくない」「考えたくない」という意識で、様々な情報をシャットアウトしてしまっているのだ。しかし、この「知りたくない」「考えたくない」という意識になっていることを明瞭には意識していないのだ。様々な情報を、種々の意見の断片を拾い集めると分かりそうなのだが、そうではない。知らないという事、考えようとはしない事は、知識・教養の、そして知性の低下ではない。このまま、「知らないままに」「気付かずにいたい」というある意味ひたむきな努力の結果なのである。大衆は、無知なのではない。怠惰の故の無知なのではない。懸命に努力した、勤勉な生活の結果なのだ。知らずにすむようにしようという、聞かなかつたことにしようとする日々の努力の故に、このことから必死になって目をそらそうとしてきた結果として、「みじめな喜劇」を選択してしまっているようだ。

これは、今まで繰り返されてきた歴史(地獄の循環)そのものである。しかし、このような意識の働きを、個人ははっきりとは意識していない。昔の経済成長への淡い期待に、いつまでも浸っていたいのだ。ぬるま湯の温泉に入っていたいと夢見ることが、幻想(消えない夢)を保持することに努めているのが、多くの人たちの意識の現状であろう。*繰り返されるのは社会構造の形式であって、個別具体の出来事ではない。

Ⅲ 「未成年の状態にとどまっている」社会的な要因³

商品の価値には、使用価値、交換価値、象徴価値という三つのレベルがある。後期資本主義社会における商品の基軸的な価値が象徴価値であろう。例えばブランド商品は、ほとんどこの価値から形成されている。この象徴価値は、商品所有者の社会的なポジションを示しており、それを持っていない人との差別化を図る指標的な機能を示している。ヨーロッパのように中世からの王侯貴族達のいる階級社会では、ブランド品は、その所有者がどの階級・階層にいるかをはっきりとあらわすものであるが、今の日本では、そうではない。日本では、商品選択の基準が、その人の趣味とか流行に対する感度というものを表している。ファッション誌やメディアがこのような象徴価値を誘導する。これによって人間を差別化させていく働きをしている。このような流行度に対して巨額のお金がかわれてきたのが、日本の特徴である。

大都会から発信された一つの基準に対するキャッチアップ能力の高低は、その人の社会的能力の指標となっている。これが「新しく素晴らしい」となると、多くの人があるにめが

³ この節では、内田樹「大人になるための経済活動—交換経済から贈与経済へ」『at プラス』03号(2010年2月)の要約をすることを通して考えたい。

けて殺到する。これが、消費行動を活性化させ、経済成長を支えてきた。

このような流行感度に対する敏感さが、消費行動が、重要な社会的資質として承認されてきた。つまり、一人ひとりのアイデンティティは、どのような商品を購入しているかによって決定されているとまで言ってもよい状態にまでなっている。どのような家に住み、どんな車に乗り、そして着飾っている服装、飲酒の場所とその種類、音楽鑑賞のジャンルによって、その人が何ものであるかが評価されるという意識が、流布してしまった。つまりは、この意識がイデオロギー(社会に支配的な集団によって提示される観念)とまでなっている。

ここに大きな落とし穴がある。

- ・商品は一定数以上生産・流通して消費されないと、それなりの商品とはならない。
- ・その商品が何であり、その物の象徴価値が、購入する物・事の社会的意味が、前もって宣伝されて理解されていなくてはならない。

つまり、物として、意味として、他の一定数の人にとって理解され所有されていなくてはならないことになる。

こうなると、その人のアイデンティティは、他者がすでに購入していたり、買いたいと思っていることを前提としてしか成り立たないことになる。私は、私とよく似た意識の人たちが一定数いることを前提としてしか、アイデンティティの確立が難しくなっていることになる。「自分らしさ」は、一人では成立しないのだ。つまり、このような消費行動を通して、自分を確かなモノとしていくという意識が確立されていくことになる。私は、そこらじゅうにいる人になることでしか、自分らしい自分を確認できないことになる。これは、弱い主体性である。これは、時の流行に揺られてしまう主体性であろう。「あれがなくては生きていけない」と考えてしまい、「あれがなくても、これがある」という生き方がなかなかできない現状である、と言えるようだ。

これでは、自分のアイデンティティの確立を図ることは難しいであろう。でも、このようにさせていくことで、経済成長が図られてきたのだ。新製品を、ブランド品を買い求め続けることで、アイデンティティの基礎づけがなされてきたのだ。そのため、自己への尊厳や他者への具体的配慮が、はなはだ希薄となりかねないことになる。でも、いくら弱い主体性であっても、アイデンティティの確立に向けてこの消費活動を止めることはできない。

社会的に人々の中で立ち振る舞うためには、自分を指し示す服や家、そして車、コミュニケーション能力を身につけなくてはならない。これがないと、それなりに評価されないことになる。そうでないと、自分らしい私は、始まらない。そのためには、先立つものが、自分の周囲を着飾るためのお金が必要となる。そのために、働くしかない。安い時給でも、……。でも、そこで働いている自分は、本当の自分ではない。社会的な人格とはなっていない不完全なものである、との意識がある。

ブランド品を買い求める消費をめぐる競争に、多くの人たちが駆り立てられている。消費を増やすためには、収入を多くするためにたくさん働かなくてはならない。でも、これは、「働き過ぎと浪費の悪循環」である。

自分を社会的な人格としてのスタートラインに立たせたいのだが、そのための消費活動をするためのお金がないと、自分を着飾ることができないと、人は無力感に陥り、非社会的にしてしまう。ニートや引きこもりの圧倒的多数は、その原因は消費を巡る競争と貧しさである。貧乏は引きこもりのためではなくして、その原因なのだ。

数年にわたって、時には数十年間も閉じこもるには、現状の自分が自分ではないと思っているからであろう。まだ、自分が始まっていないとしているのではなかろうか。また、そのために、人生を有意義に過ごしたいという意欲が、エネルギーが枯渇してしまっているのではなかろうか。

繰り返すが、アイデンティティは、社会的関係の中でしか作れないものである。周囲の人間との関係から、他者からの評価と承認を通して、だんだんと形成されるものであろう。閉じこもった人間は、人間としての成熟のプロセスに乗ることができないことになる。自分を商品によって着飾ることができないと、……。これが難しくなっている。

アイデンティティは、所有している商品で決定されるとするイデオロギーに大きく左右されている。お金がなくて商品が買えないと、一人前とはみなされませんよという脅迫めいたもので、購買力が喚起されてきた。これが、戦後の経済成長の歴史である。

さて、ここまでが内田論文のまとめである、ここからは内田氏の指摘されたことを基に考えていきたい。ここで内田氏が言いたいことは、2007年7月のサブプライム問題や08年9月のリーマンショックなど、世界的な金融危機は単なる金融システムの崩壊ではなく、20世紀型「消費主義」の終焉と理解すべきなのだ、ということであろう。

20世紀型消費主義はこれまでに、私たちの生活を成り立たせてきた旧来の家族構造や文化構造などをなし崩しに破壊してきた。とりわけ日本の1970年代から80年代のバブル期の生活には、「欲求不満」の消費主義が浸透し、ひたすら「中毒的消費」や「消費依存症」を拡大してきた。だから、その病根を解毒しようとするれば、新しい「生の様式」や新たな「生き方」を作り出さなければならない。内田氏は、それには「贈与の経済」が中心の次世代産業モデルを構築することが必要だ、と提案している。

しかし、日本社会にとっては、この1970年代以降の消費社会の到来が、市場での貨幣による商品交換が社会全体に広がったことで、それまでの封建的な人間関係、互酬的な関係を瓦解させたという、文明開化作用をしてきたことを忘れてはならない。こう、私は思う。田舎の村落共同体の規制力が弱まったのは、このためなのだから。だから、市場での貨幣による商品交換を否定してしまうと、またまた、昔に逆戻りしてしまう。そこで、「贈与経済」と言っても新しい質をもったシステムへの移行を模索しなくてはならない、と思う。また、どのような未来社会でも、市場での貨幣による商品交換は必要なのだ。市場経済という交換関係の在り方を否定してしまうのではなくして、大きな害をなさないようにしていくことが大切なのだ、と私は思っている。

内田氏は、モノを買わなければ自分らしくなれないと脅迫し続け、無理やり購買欲を喚起してきたのが現代の経済社会だと述べ、そして、さらに「その度が過ぎてアイデンティティを諦める人々を作り出してしまった」と言っている。この箇所の文章は、説得力がある。そして、「象徴価値」の縮小を述べている。これは、リースマンの言う人間類型としての「他人指向型」からの脱却を述べているのであろう。これは、洋の東西から巻き起こった「市場主義＝消費主義」批判は、戦後の世界を席卷してきたアメリカ型の市場経済制度とそれを前提にしたライフスタイルへの告発である。「市場」のみを通じて、消費者は自分の生活を形成し、企業は売り上げの拡大を狙うという、経済システムにも、そろそろ限界が見えてきたというであろう。

この意識状況から抜け出すことは、難しい。それができ得るには、それなりの知識と、今まで以上のコミュニケーション能力が必要である。でも、この能力の獲得をしていくには、今の対人関係、そして学校教育や社会教育システムを大きく作り変えなくてはならない。

IV 啓蒙の可能性、「縮小社会」についての意識を高めるには？

カントは「成人」になれとは書いていない。未成年の状態から脱することを求めている。ということは、未成年であることの可能性を提示している、とも言える。だから、ここに書かれていることは、カントの理想理念なのだ。啓蒙はかつてあった出来事ではなく、現在も続いている人間的精神の格闘であり、未成年から成人になろうとする努力こそが、啓蒙というプロセスこそが、最も大切にしなければならないことを示している。

さて、個々人が「自分の理性を使う勇気」を発揮できるようになるには、強力なリーダーの指導の下ではない。啓蒙は、個々人が、そしてそれが相互に影響しあってなされるものである。まず大衆が自ら啓蒙するしか、その効果は発揮できない。後見人を否定して、自ら考えて行動することである。後見人は、ともすると、民衆の自立を阻害していることが多いのだ。カントは、次のように述べている。

社会の中には、その理由ははっきりしないが、すでに自分の足で歩きだし、自ら考えることができるようになっていく人たちがいる。このような人たちが私たちの近くにいと、自然に感化され勇気を出せるようになれる。その具体的行動に影響されて、自らの判断で思考しようとする人が増えてくる。教師や書物を通してでは心が動かなくても、自称後見人の説教には心が開かなくても、同世代の知人・友人たちが放つ精神性が心に影響を及ぼすとして

個人が独力で歩み始めるのはきわめて困難なことだが、公衆がみずからを啓蒙することは可能なのである。そして自由を与えさえすれば、公衆が未成年状態から抜け出すのは、ほとんど避けられない事なのである。というのも、公衆のうちにはつねに自分で考えることをする人が、わずかながらもいるし、後見人を自称する人々の内にも、こうした人がいるからである。・・・自ら考えるという使命と固有の価値があるという信念を広めてゆき、理性をもってこの信念に敬意を払う精神を周囲に広めていくのだ。(p.13)

「自分で考えることをする人」とは、その時の社会や所属集団の支配的な物の見方にストレートには同調できない人であり、精神的異邦人なのではなかろうか。私流に考えると、田舎での日々の暮らしにイラつき、都会の喧騒に孤独を感じるがゆえに、自ら思考して行動する人たちであろう。でも、「自分の理性を使う勇気をもて」と言われると、一人で考えて、決意するという孤立無援の闘いをイメージするかもしれないが、カントは、そんなことを言っていない。彼は、普遍的な人間理性は、他者の理性という回り道を通してしか近づくことはできない、としている。啓蒙のプロセスは、人々との対話を通して進むのであり、他者の理性が必要なのだ。

そもそも勇気なるものをもつというには、それは他人からの精神的影響によって可能となるものであろう。私たちの理性は有限であり、他者の理性に身を開いて異なった意見にも

含まれている真理の一部を受け入れることで初めて、私たちは普遍的理性という共有財産に近づくことがなしうるのではなからうか。

自分の考えに自信がある人は、ともすると独善的にふるまうことがある。大人という言葉の意味として、一定の人生哲学を身に着けて他人の意見に動じなくなった人という意味で遣われることがあるが、これはエゴイズムそのものである。

大人になるということは、就職して家族を養うことだと思っている人もいようが、これも、ものすごく矮小化されたイメージであろう。大人として社会で与えられた職務を果たし、親としての務めを果たすことは確かに立派な事であるが、しかし、それは、レールの敷かれた坂道を転がっていくようなものである。これは、きつい言い方であるが、間違いないことだ。

自由ということの真価が問われるのは、いっさいの肩書を外して、異なった意見をもつ他人の人に語りかけた時、そのような人の言葉に耳を傾ける時であろう。違った社会階層、異なった言語、自分とは違う文化的背景というある意味断絶とも言い得る事態でも、それでも通じ合う言葉を求めて関係を維持しようとする時に、私たちの本当の勇気が問われているのであろう。

人は言葉を交わす限り、そこにはひとつの大きな世界がある。その世界を故郷(内田樹氏の言う贈与関係・互酬性的関係性の通じる)として、そして未来社会(互酬性的関係性の新たな形での実現)のあるべき姿を指し示すものとする時、まだ会ったことのない地球の反対側の人たちや、過去と未来の他者との対話が始まる。

これは、カントの言う「世界市民」であるかのように理性を使用することであろう。全世界の人々を自分の同胞ととらえる思想的立場をコスモポリタニズムという。カントは、公共の言語空間に、啓蒙の可能性をさぐろうとしている。カントが考えた舞台は、職場や日々の生活の場ではなくして、言論の空間であり、言論の公共世界である。日々の生活で、このような世界市民であるかのように生きることが可能となるには、まず、公共的な言語空間が自由な発言の場となれるようになっていなくてはならない。そして、自ら考える人たちが、このような公共的な言語空間に積極的に、私たちも参加することが、無条件に承認されていなくてはならない。さらに、この場での活動を通して、この言語空間で語られていることが一般大衆にまで広がっていく条件を整備しなくてはならない。

イノベーター理論では「革新者」は2.5%の人たちしかいない。そこで、この人たちの諸活動で、まずは13.5%の「初期採用者」に影響を与えることができるように工夫しなくてはならないであろう。

・・・公衆を啓蒙するには、自由がありさえすればよい。しかも自由のうちで最も無害な自由、すなわち自分の理性をあらゆるところで公的に使用する自由さえあればよいのだ。
(p. 14)

・・・どのような制約であれば、啓蒙を妨(さまた)げることなく、むしろ促進することができるのであろうか。この問いにはこう答えよう。人間の理性の公的な利用はつねに自由でなければならない。理性の公的な利用だけが、人間に啓蒙をもたらすことができるのである。これに対して理性の私的な利用はきわめて厳しく制約されることもあるが、これを制約しても啓蒙の進展が特に妨げられるわけではない。(p. 15)

自覚的・主体的な思考をする人たちをたくさん作り出すには、カントの言う「未成年の状態から抜け出る」には、この現代の大衆社会では、まず各メディアの報道の自由の確保を第一の課題としなくてはならないであろう。カントは、こうすることが啓蒙のための必要条件である、としている。例えそれが一国の最高権力者であっても、メディアによる批判や批評は、それが下品なものであっても、最大限に許容されなくてはならない。権力者に対する批判や批評がどれほど保障されるかは、言論の自由と民主主義の成熟度をはかる大事な指標であろう。

V 理性の「公的」使用を!

『啓蒙とは何か』は、抽象的な理念を書いたものではない。当時の政治的な情勢へのきわめて時事的なことを論じたものである。「自分の理性を使う勇気をもて」ということは、まだ啓蒙されていない民衆に向かって書いているというより、啓蒙されていると自認している文化人(民衆の自称後見人)たちに向けて書かれたものなのである。

このカントの文章は、1784年の11月号の『ベルリン月報』に掲載されたものであるが、この文章は、極めて政治的な文章である。この年の4月号に掲載された、当時のプロイセンの司法官僚であるクラインの「思考と出版の自由について一君主、大臣、文筆家へ」への強烈な反論である。もっと言えば、当時首都であるベルリンの文筆家たちの抱いていた政治思想の基本的枠組みに対する、遠く離れたケーニヒスベルグからの批判である。

当時のこの雑誌の著者たちの多くは公職についていて、文筆を生業としていたのはほんの少ししかいなかった。つまりは、クラインも、カントも、このような世にいう文化人、それも教師や官僚、そして教会関係者の言論の在り方を問題としていたのだ⁴。

クラインは現役の官僚として、体制の維持と、言論の自由の誤用を戒めるために書いている。そう、言論の自己規制をするべきであると、している。まず服従がありで、この義務を果たさないで国政を批判するのは、「自由の誤用」であるとした。出版の自由が貴重なものであっても、これを軽率で低俗な使用によって国家社会を危険にさらしてはならないように気をつけなくてはならない、何を語るべきか、何について口を閉じるべきかをよく考えよ、と。つまり、クラインは、王への、国家体制への、そして国家行政を担っている官僚たちへの「服従」と、「言論の自由」の使い分けを求めているのだ。これは、君主(フリードリッヒ二世)には「未成年」としてふるまい、民衆に対しては後見人としてふるまうようにと、啓蒙されていると自認している文化人(自称民衆の後見人)たちに言っているのだ。つまりは、「言論の自由」の前に、まず「服従」という行為規範を提示し、言論の自己規制を求めている、と言えよう。

クラインは言葉としては「検閲」を批判しているが、実は、この「自己検閲」は、より一層大きな問題である。自己検閲は、それに従えば従うほど、自己の言論の自由を抑圧するこ

⁴ 当時のプロイセンの圧倒的多数である農民は、この地では「農奴」であった。土地に縛り付けられた生活を日々していた。この農奴が解放されたのは、対ナポレオン戦争でプロイセンが壊滅的敗北をした後である。社会の近代化を図るため、農民の自主的闘争で勝ち取ったものではなくして、上からなされたものである。

とになる。自己検閲をした者は、他者を検閲して抑圧することになるであろう。検閲事項がきちんと明示されていない場合、人々は検閲を恐れて委縮して、その限界のはるか手前で、書くことや意見の表明さえ断念してしまうかもしれない事態になりかねない。

クラインは、国家行政に従事する官僚としての公的な理性の使用と、仕事をしている時間以外の私的な理性の使用の区別を強調したが、これを逆手にとって反論したのが、カントの「私的」と「公的」の論法である。カントは、また、クラインとよく似た事例を使用しながら、それに対して理性を「公的に」使用する無制限の自由を主張している。

そこで、クラインの「私的」「公的」の区別と、カントの「私的」「公的」の違いを示すことで、この『啓蒙とは何か』が当時の政治体制への厳しい批判文であることを明らかにすることができるであろう。

クラインの「公」とは、仕事をしている者としての理性の使用であり、「私」とは就業時間外の理性の使用、という区分である。カントはそれを反転させて、公職にある者の「服従」を「私的」とした。

そして、理性の私的な使用とは、ある人が市民としての地位または官職についている者として、理性を行使することである。（*クラインの言う意味での）公的な利害がかかわる多くの業務では、公務員がひたすら受動的にふるまう仕組みが必要なことが多い。（p. 15）

カントにすれば、個人や集団（官庁）の営みは、このようなことに関係しない人や他の集団から見ると、どれも家族的であり、閉鎖的であり、「私的」である。この集団内のきまりは、その成員にとって守らなくてはならないということで「公的」とも言い得るが、別の集団にとってはなんらの強制力もない「公的」なものとはなっていない。

例えば、ある人がその国のために諸活動をすることは、「私的」な事である。他の国から見て、何の公共性もない。「公的」であるとするのが、あらゆる人間に普遍的に妥当とする意味ならば、この時の立脚している地平は世界市民的でなくてはならない。このように、世界市民としての立場から理性を使用するのが「理性の公的」な使用となる。このように、カントは、クラインの言う視点に対して、一つ上のレベルからの視線を提示している。

こうした機構に所属する人でも、みずからを全公共体の一員とみなす場合、あるいはむしろ世界の市民社会の一人の市民とみなす場合、すなわち学者としての資格において文章を発表し、そして本来の意味で公衆に語りかける場合には、議論することが許される。・・・それによって、この人が受動的にふるまうように配置されている業務の遂行が損なわれることはない。（p. 16）

・・・世界に向かって文章を発表し、語りかける時には、・・・みずからの理性を利用し、独自の人格として語りかける無制約な自由を享受するのである。（p. 18）

すべての市民、特に聖職者が学者として、すなわち文章を発表するという方法で、その時代に存在している制度の欠陥について自分の意見を公表する自由（*公的な理性の使用

の意味)を与えられるべきである。(p. 20)

このように、カントは「世界市民」の視点から理性を使用することが「公的」であるとして、世界へのまなざしを妨げている自称後見人と、この後見人に庇護を求める「未成年」状態のままにとどまろうとしている人たちに、態度の変更を要請している。「未成年」とその後見人との依存関係を解体させない限り自由は実現しないのであり、この枠組みの外で思考するための「理性の公的」な使用を提示している。

現在の日本社会において、この「理性の公的」な使用がしやすい条件下にあるのが年配者であろう。若い人たちにとって、「経済成長」は自分たちの生活を保障するものとして当然なこととして、そうあらねばならないものとして受け取られことが多いであろう。成長によって仕事や収入が確保したいと思うのは当然なことになるであろう。十年後より今の生活を確保するためにという保守的な思考をしてしまうのは、この厳しい経済状態では仕方がないようだ。生活水準が低下したおぞましい社会なんて想像などしたくないであろう。しかし、年配者は、昔の低エネルギーの社会の記憶がある。今より生活条件が低下しても生きていけた経験がある。将来の本格的縮小社会を展望するとき、この差は大きなものとなるであろう。年配者の中には、カントのいう「理性の公的使用」ができる条件下にいる人たちが一定する出現するであろう。

VI 老人運動の活性化を！ 縮小社会を展望する個人的思いや各自の「思想的地平」を冊子として発刊しよう

ここからは、これまでの述べたことを踏まえて、「縮小社会研究会」の在り方についての一つの意見・提案を述べたい。

歳をとり老年期になって一番辛いのは、友人・知人が一人、またひとり、と死んでいくことだ。一人死ぬたびに、私の中の何かが死んでいる。その人との関係の中で存在していた自分は、他のどのような人をもってきても代替えできない自分が、なくなっていくことに気付く。記憶を共有する相手がいなくなると、その時の自分がきわめて希薄になってしまう。個々人の主体性なんていうものは、私一人できていくわけではないのだから、他者との関わりを通してしか成立しないものなのだから、……。まず個人の主体があって、それから他の人と関わっているのではない。他者との関わりを通して、それによって自分という像が作られてくるのだから、……。アイデンティティは、社会的関係の中でしか作れないのだ。

そのためには、複数の関係性を作り出す努力を、若い時からしなくてはならない。複数の集団に、それぞれ違う役割で所属することでしか、自立的思考なんてできないと言えよう。ここでは責任を取るつもりで行動し、あそこでは人の後からついていけばよいというような多様な関係性を経験し、いろいろな集団に同時に所属していないと、自分の社会的な人格の多様性は、理解できないであろう。

サラリーマンの大きな落とし穴は、また官僚たち等の問題点は、一つの組織に異常な熱意で所属していることであろう。そのために、人格が単一化してしまうことである。会社の倒産、定年、失職等のために人格崩壊や生きるエネルギーがなくなってしまうことがあるが、これは、それまでに作られていた対人関係が、自分が何者であるかを保証してくれる他者が

一か所に固まっていて、一つの価値観で評価されているためである。そのために、そこがなくなると自分が社会的にゼロとなってしまうことになりかねないためであろう。

定年退職した後は趣味の生活を、なんて言ってもそれは無理な事である。その趣味の生活でも、それができ得る人間関係がなくてはならない。そうでないと、これからは、老人性のうつ病の人がたくさん出てくることになりかねない。40歳台、50歳台から、仕事以外のことに、ある程度の時間とエネルギーをつかうこと、いろんな集団内での人間関係に帰属する努力が必要となるであろう。そうしないと、その後の人生に大きな差ができてしまうことになる。

さて、歳をとると、商品の象徴価値を追い求める意欲は、少しずつ減退していく。自分を指し示す服や家、そして車、コミュニケーション能力を身につけなくてはならない、これがないとそれなりに評価されないことになる、そうでないと自分らしい私は始まらない、なんていう若者に特徴的な意識は薄くなる。アイデンティティが所有している商品で決定されるという程度が弱くなることは、間違いない。自分を社会的な人格としてより有利にスタートラインに立たせたいという想いが、希薄になってくる。このようなことこそが、「理性の公的使用」へと向かわせているのではなかろうか。

このような意識の違いに基づいて、社会を縮小させていく運動を活性化させていくことができそうである。今の日本社会では、第二の人生を過ごし始めたこの年代の人の割合が高いのだから、この人たちに訴えかける言葉を見出したり、活動のスタイルを提示すれば、「縮小社会」の必要性を訴えていく運動を作り出せるであろう。このような意識をもった年配者を増やすことで、層としての社会運動を作り出せる可能性がある、と言えよう。このような一つの層としての老人運動を作り出したいものである。学生運動が、もう層として成立しないのであれば、私達のような人生の二毛作目を送っている人たちが、一つの運動を作り出すのではないか。

この「縮小社会研究会」は、すでに、このような実態となっていると言えよう。この現状を、より活発なものへとしていきたいものである。

〈他者の理性という回り道〉

このような現状に立ち向かうには、この現状にそれなりに対応して多くの人と交わることができ得るには金銭が必要なのだが、それよりも大切なのは、それなりの知識とコミュニケーション能力が必要となるであろう。歳を取ると若い時期と比べてお金はそんなに必要ではなくなるのだから、他の人との会話を楽しむという積極性が最も必要であり、その人との関わり合いから新しい関係性や知識の再構築をする喜びを見出していくことが最も大切なことになるであろう。

ここに、「縮小社会」という理念を広めていく活動をしていく上での、組織運営上の留意点が存在する。年配者が再度元気になれる諸方策を講じなくてはならない。小グループでの意見発表の機会を増やすことをしたり、ミニ討論会を設定することが大切となる。講演を聞くだけではない、各自が縮小社会を思い描くその思想的基盤を述べる機会を増やすことである。今までの人生や日常生活に基づく自分の立脚点や思考の地平を気楽に話して、それを文章化して小冊子にしようではないか。

老人運動部会、名前が良くないかもしれないが、……。第二の人生部会、いや、おしゃべり会、でもよいようです。専門領域のある分科会ではなく、各分科会を横断した部会にしたらどうでしょうか。各自が少し長い自己紹介をするつもりで話せばよいのだから、……。この語りがその人の思想的基盤なのだから、……。 「しゃべりたい人、集まれ!」なんていう会があってもよいであろう。昔、京都にいた儒学者の伊藤仁斎の塾では、飲み食いしながら講義がなされたと聞く。このような飲食をともなう意見の発表会も、しようではありませんか。そして、そこでの話をまとめた冊子を次々と発刊しよう。

カントは、普遍的な人間理性は他者の理性という回り道を通してしか近づくことはできない、としている。そして、自己の理性を使用する勇気をもつためには、他人からの精神的影響によって可能となるであろうと述べている。私たちの理性が、他者の理性に身を開いて異なった意見にも含まれている真理の一部を受け入れることで初めて、私たちは普遍的理性という共有財産に近づくことがなしうるのだ。

「縮小社会」についての意識も、理論書や学術書や論文という学者等の後見人を通して広がるだけではなくして、周囲の人たちの日常の語りかけという精神的影響によって、人々の心に「縮小社会」の意識が宿ることが多い。意識の向上は、個々人が、相互に影響しあってなされるものであり、大衆が自ら啓蒙するしか、その効果は発揮できない。だから、そのための一つの方法として、「縮小社会研究会」に自分が関わる個人的な理由を、「縮小社会」について考えるその人の日常生活に基づく「思考の地平」を話し言葉で書いて冊子として発刊することを提案したい。「少し長い自己紹介」を気楽に語る人たちがいることで、その冊子を読むことで、自然に感化され「縮小社会」について考える機会とすることができるのではなからうか。

それまでの既成の組織で高く評価されていた人ほど、第一の人生を引退すると孤立して鬱(うつ)になりやすい。新しい集団では初心者として、子ども扱いされることになりかねないのだから、それに耐えるだけの、その集団の中での会話を楽しめる能力が必要となるであろう。ここが、難しいところであろう。60歳を過ぎて、自分を作り直す努力(リスマンの言う「内部指向型」としての自分なりの人生上の羅針盤を作り)をすることができるか否か。第二の人生における自分づくりができるか否か。ここが分かれ目である。